

## ルカによる福音書7章1-17節 「届かない人に届くイエス」

### 1A 異邦人の百人隊長 1-10

#### 1B 熱心な願い 1-5

#### 2B イエスを驚かせる信仰 6-10

### 2A 独り息子を失った寡 11-17

### 3A パプテスマのヨハネの迷い 18-23

## 本文

ルカによる福音の学びは、イエス様がガリラヤの宣教において、御言葉の教えとそれにとまなう権威を、奇跡によって示しながら、「幸いなる人」として神の国に入る者たちの生活をお話しになりました。貧しい者は幸いであるという話から、迫害される者は幸いであると話され、敵を愛しなさいという命令を行いました。貧しい者が幸いで、富んだ者が災いとイエスは言われたのですから、この御言葉の権威による神の国は、この地にある価値とは完全に衝突するものなのです。ですから、必ず敵を作ります。しかし、その敵をも愛することによって御国の拡がりに関わっていくことをイエス様は教えられました。

そこで必要なのは、自分には決してできないという認識です。クリスチャンになることが良い人になることではないことをイエス様は教えてくださいます。良い人になることではなく、キリストにあって変な人になることだ、と言っても過言ではありません。師匠なるイエスを徹底的に真似し、それから人を変えるのではなく、語られた御言葉は自分自身の目の前の梁、材木を取り除き、そしてその信仰は、地面を掘り下げてキリストという岩に到達するところまで深める、という命令でありました。

このように、イエス様が広げておられる御国において、象徴的な出来事を二つ、ルカは書き記しています。一つは、ローマの百人隊長です。ユダヤ人にとっては、ローマの武力を象徴し、身近にいる存在であります。つまり、自分たちとは遠く離れた、むしろ反対したい存在です。もう一つは、ひとり息子を失った寡です。現代のような社会福祉制度のない彼女は、セイフティーネットを失い、絶望的な状態にいました。しかし、この貧しき寡に、これまでにない大奇跡を行われます。そして、これらのことを聞いたパプテスマのヨハネが、「来るべき方はあなたなのですか。」と尋ねるのです。メシヤ到来の先駆者であるヨハネまでが、イエス様の行動を見て悩ませる程、その働きは意表を付き、斬新で、つまづかせるものでした。

### 1A 異邦人の百人隊長 1-10

#### 1B 熱心な願い 1-5

7:1 イエスは、耳を傾けている民衆にこれらのことばをみな話し終えられると、カペナウムにはい

られた。

平地においてイエス様が、6章における御言葉を語られた後、そのままカペナウムに行かれました。ですから、6章ではカペナウムからそれほど遠くないところに、この平地があったものと思われます。

カペナウムは、片田舎の町であり、けれども人里離れたところでもない、他の地域とつながりのある町です。なぜなら、エジプトからメソポタミアまでつながっている国際幹線道路「ヴィア・マリス」、海沿いの道が通っていました。メギドからイスラエル平野を通り、そしてガリラヤ湖を通り、北上してダマスコに行きます。このような交易路のある町でありました。したがって、ここでイエスが行われたことは、たちまち他の地域に広がっていきました。ちょうど、貿易中継都市だったエペソのようなところでは、パウロが語っていた福音がたちまち広範囲に広がりました。けれどもカペナウムは、ヘロデが定めたガリラヤの首都、ティベリヤから離れています。ですから、福音宣教の働きに政治的な邪魔が入りにくい場所でもあります。

小さな村でありましたが、漁業が発達していました。そして、農民や商人、取税人などいろいろな職業の人たちがおり、比較的平等に暮らしていました。ですから福音を語る時に、一部の人にしか伝わらないという心配もありませんでした。これらのことが、イエス様にとってカペナウムを本拠地にした背景なのかもしれません。

このガリラヤを治めていた国主、ヘロデ・アンティパスはここにローマ兵の駐屯地を作っていました。それでこの百人隊長がいるのです。

7:2 ところが、ある百人隊長に重んじられているひとりのしもべが、病気で死にかけていた。

ローマの台頭を預言するダニエルの言葉によれば、それは、大きな鉄の牙をもったおぞましい獣です(7:7)。その実行者が百人隊長であり、ユダヤ人にとっては自分たちを抑圧する立場にいる人たちであります。

しかし、こうでも説明しなければ、新約聖書に親しんでいる人々は、百人隊長について良い印象を持っていることでしょう。十字架の現場を最後まで見て、「ほんとうに、この人は正しい方であった。(23:47)」と言ったのは百人隊長でした。そして、カイザリヤにいたコルネリオが、新約聖書における代表的な百人隊長です。そして、パウロがカイザリヤからローマに囚人として移送される時に、その囚人たちを移送させたのは、ユリアスという親衛隊の百人隊長でした(使徒 27:1)。思えば、旧約聖書でも敵シリヤの将軍ナアマンも、イスラエルの神を信じた人でありました。

それだけ、神の見ておられる視点と、私たち人間の見ている視点が違うということです。確かに、

百人隊長は奴隷、あるいは僕を持っていても、その奴隷が病に罹ったり傷を負ったのであれば殺してしまうような状況にありました。しかしこの百人隊長は違うのです。自分の重んじている奴隷が病気にかかり、何とかしなければいけないと考えました。次にユダヤ人の長老たちが、彼がいかにユダヤ国民を愛しているか、ユダヤ教会堂の資金提供までした人なのだ、という話をしています。そして、彼はイエス様をしてさえ驚かせる信仰を持っていました。

ここから分かることは何でしょうか？ 私たちはいつの間にか、自分たちの生きている社会の中で差別をしているということです。意外に、弱者と呼ばれている人々だけでなく、百人隊長のように強者と思われている者たちには、福音は伝えないと考え、壁を作っている場合があります。けれども、職業でそのように決めてしまうことは悪いことです。そして、そのような人々に、神は、そしてイエス様は働きかけておられることを知らなければいけません。

ずっと前のことですが、ある教会に通っている自衛隊の方が聖書の学び会にいらっしゃいました。神学校に行く準備をしておられましたが、自衛隊の中に「コルネリオ会」というものがあります。大正時代から始まっています。現代の会長は、防衛大名誉教授の方です。その会は、自衛官に福音を宣べ伝える働きをしておられます。けれども、自衛隊に生理的抵抗感があるクリスチャンが多いと聞いています。なぜなら、戦争をし、人を殺す職業なのに、クリスチャンは避けるべきものという考えからでしょう。けれども、それはまさに当時のユダヤ社会と同じでした。

しかし、新約聖書の著者たちは、百人隊長への働きかけを克明に書き記しているのです。それだけ、私たちがイエス様の福音の範囲を狭めてしまっていると言って良いのです。

7:3 百人隊長は、イエスのことを聞き、みもとにユダヤ人の長老たちを送って、しもべを助けに来てくださるようお願いした。7:4 イエスのもとに来たその人たちは、熱心をお願いして言った。「この人は、あなたにそうしていただく資格のある人です。7:5 この人は、私たちの国民を愛し、私たちのために会堂を建ててくれた人です。」

イエス様の噂が広まっていました。それを聞いて助けを求めようとしたのですが、彼は自分自身で行かず、ユダヤ人の長老たちを送りました。ここの「長老」というのは宗教的指導者ではなく、行政的な役人のような存在でしょう。ローマの百人隊長と行政の面で何らかの接触のある人たちです。彼がなぜ自分自身で行かなかったのか、それは後に出てきますが、彼はイエスに会う資格はないと考えていました。ここに、彼の謙虚さが表れています。覚えていますか、将軍ナアマンはエリシャの家の所まで行きましたが、エリシャではなく僕が家から出て、七度、ヨルダン川に浸かりなさいと言われたら、非常に憤りましたね。軍人であれば、そのぐらいの気概と誇りがあるものですが、彼にはそれがなかったのです。

ユダヤ人の長老たちを送ったということ、また、彼らの会堂の資金提供をしたことを考えますと、

彼はユダヤ人の神を畏れ敬っていた人物ではないかと考えられます。ユダヤ教に改宗しているのではないのですが、ユダヤ教の神を敬っている人です。コルネリオがそんな人でした(使徒 10:2)。百人隊長は高給取りでしたが、その金を会堂建設のために貢献したのです。ですから、なおのこと自分は異邦人であり、ユダヤ人のラビには近づけないと思ったのでしょう。

ユダヤ人の長老たちは、云わばロビー活動をしています。百人隊長がいかにかユダヤ国民のことを愛しているか、会堂も建ててくれたし、彼の僕を助けてもらうに値する人だということを力説しました。「熱心をお願いして言った」とあります。彼らが強いられて行っているのではなく、事実、尊敬を彼らから得ていたのでしょう。

## 2B イエスを驚かせる信仰 6-10

7:6 イエスは、彼らといっしょに行かれた。そして、百人隊長の家からあまり遠くない所に来られたとき、百人隊長は友人たちを使いに出して、イエスに伝えた。「主よ。わざわざおいでくださいませように。あなたを私の屋根の下にお入れする資格は、私にはありません。

ユダヤ人の長老たちは、彼が資格のある人だと言っていたのに、本人は資格のない者であると言っています。なんという、へりくだりでしょうか。ちょうど、ペテロが「私は罪深い者です。近づかないください。」と言ったのと同じへりくだりです。同じルカの書いた使徒の働きでも、コルネリオが使徒ペテロを迎える時、間違った行為でしたが、ペテロに対してひれ伏すことまでしました。自分たちの家に使徒をお迎えすること自体が、畏れ多いことと思っていた訳ですが、この百人隊長はお入れすることさえできない、と言っています。

先ほどはユダヤ人の長老たちであり、表向きのお願いでしたが、今は友人たちを使いに出しています。お入れすることができないというのが、彼にとってもっと個人的な気持ち、本音が表れていると思います。そして、彼がどのようにイエス様を呼んでいるかが大事です。「主よ。」と呼んでいます。彼の信仰の原点がここにあります。イエスが主権者であられ、一切の権威を持っておられるとうことです。

7:7 ですから、私のほうから伺うことさえ失礼と存じました。ただ、おことばをいただきませう。そうすれば、私のしもべは必ずいやされます。7:8 と申しますのは、私も権威の下にある者ですが、私の下にも兵士たちがいまして、そのひとりには『行け。』と言えは行きますし、別の者に『来い。』と言えは来ます。また、しもべに『これをせよ。』と言えは、そのとおりにいたします。」

これが驚くべきことですが、次にイエス様ご自身も驚かれます。これまで、私たちはイエスの言葉に権威があることを学んできました。イエス様は、中風の者について「人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを、あなたがたに悟らせるために。(5:24)」と言われて、その男を立てました。その言われた言葉によって、その人に力が働いたのです。そして、その力が働くためには、地面を

掘り下げて岩のところに土台を据えて家を建てるように、イエスという岩のところまで行くような、そのような聞き方をしなければ、御言葉を実行することはできないとイエス様は語られました。この御言葉にある力を、究極の形で具現化しているのが、この百人隊長の信仰の言葉なのです。

そして、なぜ彼がそのような信仰を抱くことができたのか、それは彼が権威というものをよく知っていたからです。それは軍隊にある指令系統であります。まず、「私も権威の下にある者ですが」と言っています。彼には実に大きな力が与えられていました。しかし、彼はこのように言ったのです。権威と力が与えられている者は、自らが権威の下にあることを知っています。「人はみな、上に立つ権威に従うべきです。神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられたものです。(ローマ 13:1)」

ですから、自分が権威に従っているということを知らない人は、イエスの御言葉という権威に従う術も知らない、と言っても過言ではありません。なぜ、十戒において神に対する戒めが四つあり、六つ目から十番目までの戒めが人に対するものでありますが、その真ん中に第五の戒め、「あなたの父と母を敬いなさい。」という言葉があるかが重要であります。それは、子は親の権威に従うことによって、神を信じる機会が与えられるということです。権威を知らないもの、服従することを知らない者はイエスを信じることさえできません。

そして、彼の信仰が優れているのは、イエス様もまた権威の下におられる方であることを知っていたことです。「私も権威の下にある者ですが」と言っていますが、イエスも権威の下におられたことを知っています。イエスと父なる神は一つであります。同質の方であり、同じ神ですから対等であります。しかし、もし同質で対等であれば真つ二つに対立します。戦争で、互角であれば朝鮮半島のように分断されてしまうのが落ちです。しかし、イエスは子なる神として完全に父なる神に服従されていたのです。「子は、父がしておられることを見て行なう以外には、自分からは何事も行なうことができません。父がなさることは何でも、子も同様に行なうのです。・・また、父はだれをもさばかず、すべてのさばきを子にゆだねられました。(ヨハネ 5:19,22)」イエスは父なる神の権威の下にご自分を置かれたから、ゆえに父なる神は一切の裁きを子に委ねられました。権威に服従しているものは、それだけ権威と力を神から委ねられます。

主なる神が、「万軍の主」と旧約聖書で呼ばれていることを思い出してください。万軍とは、天の軍勢のことです。天における御使いは、基本的に軍隊であります。指令系統の中で生きている者たちです。その系統から外れたから、サタンはその領域から追い出されたのです。そして、イエス様の宣教そのものが、霊の戦いという枠組みの中にあります。御霊によって悪魔の誘惑を受けられ、それから会堂で教えておられた時に初めに反応したのは悪霊どもで、彼らはイエスが神の子であると騒いだのです。そこから出てくる、天から出てくる言葉ですから、私たちはそれを服従の心をもって聞くときに力を持つのです。

7:9 これを聞いて、イエスは驚かれ、ついて来ていた群衆のほうに向いて言われた。「あなたがたに言いますが、このようなりっぱな信仰は、イスラエルの中にも見たことはありません。」7:10 使いに来た人たちが家に帰ってみると、しもべはよくなっていた。

イエス様が驚かれることは、極めて稀です。もちろん、イエス様は神であられ全てを知っておられますが、しかし人でもあり、感情を持っておられます。ここまで信仰の本質を弁えている人はいない、イスラエルの中にさえないと言われていました。皮肉なことに、イエス様が他の箇所では驚かれているのはナザレにおいてであります。「イエスは彼らの不信仰に驚かれた。(マルコ 6:6)」

つまり、神の国の現れ、イエス様が貧しい者は幸いです、という言葉から始まる神の国の現れは、異邦人でしかも軍人においてであったというのが、信じられない程のことです。これが同じ著者ルカによって、使徒の働きにおいて実現していきます。初めはエルサレムでユダヤ人の間のみで信じられていましたが、異邦人も信仰によって清められることがしかし、これが私たちへの呼びかけではないでしょうか？イエスが来られたのは、罪人を救うためです。そして、隔ての壁を壊して二つを一つにする、平和として来られました。イエスは、このような人は受け入れられないと教会の中で思われている人に届きたいと願われているかもしれません。

そして、百人隊長の友人が家に帰ってみると、その僕はすでに良くなっていました。つまり、一切触れることなく、イエスの言葉によって癒されたということです。この話では、「信仰」が強調されています。この章の最後に、不道德な女がイエスのところにやって来ますが、そこでも「あなたの信仰が、あなたを救ったのです。(ルカ 7:50)」とイエス様は言われています。主はいつでも私たちにおられ、私たちが信仰を働かせればその力を現してくださるのですが、その信仰を積極的に働かせて、初めてそのお姿に預かることができます。

## **2A 独り息子を失った寡 11-17**

そして次は、まともや全く別の形で、一般社会から疎外されようとしていた人にイエスが近づかれた話であります。

7:11 それから間もなく、イエスはナインという町に行かれた。弟子たちと大ぜいの人の群れがいつしよに行った。

ナインのいう町は、ガリラヤ地方の南東部分、タボル山より下の部分にあります。イスラエル平野にあるモレ山があります。かつてギデオンと三百人の勇士が、この山を越えてミデヤン人を襲ったところです。その山の南にシュネムがあります。あのシュネムの女の話はそこで起こりました。興味深いのは、シュネムの女も死んだ男の子をエリシャに生かしてもらいました。その反対のふもとにナインの町があります。この時は、十二使徒だけでなくおそらくもっと多くの弟子たちがついてきて、さらに大勢の群衆がいました。

7:12 イエスが町の門に近づかれると、やもめとなった母親のひとり息子が、死んでかつぎ出されたところであった。町の人たちが大ぜいその母親につき添っていた。

町の門とありますが、この町に城壁があったのでしょうか。その城壁の外にある墓地に埋葬しようとしていました。そこから出てきたのが、寡です。先ほども話しましたように、寡になるということは乞食になるのと同じぐらい生活に困窮する状況であります。だから、モーセの律法にはやもめの世話をしようとの命令があり、新約聖書でもパウロが、本当のやもめを養うようとの指導をしています。そこで、かけがえのない一人息子が死んでしまいました。これほど、絶望の淵におとされることはありません。

ユダヤ人の埋葬は、死んでその日のうちに行われます。ここにあるように、大勢の人たちがついてきて、その死を嘆き悲しみます。私たち日本人の葬儀とは異なり、嘆き悲しみの感情をいっぱいに出して泣きます。それを七日間行ないます。その姿をイエスはご覧になりました。

7:13 主はその母親を見てかわいそうに思い、「泣かなくてもよい。」と言われた。

イエス様は「かわいそうに」思われました。この「かわいそう」という言葉は、新約聖書の中で腹の底で感じるような深い感情を言い表すギリシヤ語であり、イエス様が何度もお感じになられた言葉であります。例えば、「また、群衆を見て、羊飼いのない羊のように弱り果てて倒れている彼らをかかわいそうに思われた。(マタイ 9:36)」単なる可哀想ではなく、心動かされて、行動にまで出ていくような憐れみの感情であります。イエス様はもしかしたら、ご自分のことを投影されているかもしれません。父なる神にとってご自身は独り子であられます。神にとってご自身はかけがえのない、愛してやまない息子であられます。その自分が罪の供え物とならなければいけないことは、御父にとってどんなに腹が引き裂かれるような思いか、そのことをお感じになったのかもしれませんが。

そこで、「泣かなくてもよい」と言われました。それは、泣かなくてもよくなるように主がしてくださるからです。これが神から出てくる憐れみと、他の人々の抱いている同情との違いです。神は、同情されるだけでなく行動に移すことができる方です。可哀想に思われたら、次にその状況から救う行動に出ておられます。

そしてここで、主語がイエスではなく「主」となっていることに注目してください。先ほどの百人隊長は、自分自身でイエス様を「主」と呼びましたが、今、イエス様はこの寡のために、自ら彼女の「主」となってくださいました。これが神の国の拡がりの一つです。この寡のように窮地にある人に対して、イエスは自ら、彼らが信仰をもって近づかそうでないかに関わらず、主となってくださいます。例えば、私たちは以前、東日本大震災の後に救援旅行に行きました。その人たちは、信仰を持っている訳ではありません。しかし、イエスという方がおられることを、私たちの救援活動によって知ることができました。その後に信仰を持ってくれることを期待しますが、それに先行する主の

憐れみの業があるのです。

7:14 そして近寄って棺に手をかけられると、かついでいた人たちが立ち止まったので、「青年よ。あなたに言う、起きなさい。」と言われた。7:15 すると、その死人が起き上がって、ものを言い始めたので、イエスは彼を母親に返された。

イエスが近寄りました。主が近寄ると、必ず何かを行ってくださいます。そして手をかけられました。手をかけたので、棺を担いでいる人が止まりました。ところで、この手をかけるという行為は、汚れることとなります。死体に触れたら汚れるからです。しかし、イエスは聖なる神ご自身です。汚れが移されるのではなく、反対に聖めが与えられます。この場合は、死んでいたのに起き上がったので、死体に触れたことにならないのです。

イエスは、かつてヤイロの娘に行われたように、死体に向かって語られます。死に対して語り、それに立ち向かい、そして死に打ち勝つ力と権威をもって語られます。イエスの言葉の権威は死にまで及ぶのです。そして、はっきりと生き返ったことを示すため、ルカは、「ものを言い始めた」と言っています。そして、大事なのは「イエスは彼を母親に返された」ということです。イエスの力が現われたこと以上に、彼女に生きた息子を返すという憐れみの業がイエス様にとっての焦点でした。私たちはしばしば、如何に力ある業が行われるかに注目しますが、そう出はなくいかに憐れみの業が行われているかに注目されなければいけません。

この後、使徒の働きでペテロが、ヨッパに近いルダにいるタビタという女弟子に対して、「タビタ。起きなさい。」と言いました。ルカによる福音書は、使徒たちの働きが確かにイエスの行なわれたことを、聖霊の力によって行っていくということを意識して書いていることがよく分かります。

7:16 人々は恐れを抱き、「大預言者が私たちのうちに現われた。」とか、「神がその民を顧みてくださった。」などと言って、神をあがめた。

恐れというのは、まさに「恐怖」という意味の言葉です。「大預言者が」と言っていますが、これはエリヤやエリシャのことを指しています。イスラエル人にとって、数多くの預言者の中でその二人はモーセの次に来るような大預言者であります。後で、ヘロデ・アンティパスは、エリヤが現われたという噂を聞きました。またエリシャのように、人を生き返らせることを行ないました。

そして、「神がその民を顧みてくださった。」と言っています。これは、ついに神が私たちの苦しみを見て、その救いを行なう時が来たのだという意味です。ちょうど、四百年間、エジプトで苦しんでいたイスラエル人が、モーセとアロンがやってきたことを見て、ついに神が来られたと思ったのと同じです。

7:17 イエスについてこの話がユダヤ全土と回りの地方一帯に広まった。

このようにして、どんどん広がっていきます。ルカは詳細に、何かの出来事の後一気に広がることを書き記しています。これはガリラヤでの出来事ですが、ユダヤ全土に広がりました。そこにはエルサレムがあります。また、周りの地方にも広がったとありますが、ヨルダン川の東岸ペレヤ地方にも広がったことでしょう。なぜなら、死海の東にある、ヘロデの要塞である、マカエラスにバプテスマのヨハネが幽閉されていて、そこで彼はこの話を聞いて、それで次の話、「来るべき方はあなたなのですか？」と尋ねているのです。

次の箇所は次回学びますが、バプテスマのヨハネをしてさえ、イエスの行動がメシヤのそれであるのかという疑問を抱かせる程の、届かないところに届いておられるイエスの姿を見ることができました。私たちも宣教の働きにおいて、この働きをイエスが行おうとされていることに注目しなければいけません。つまり、自分たちにとって近寄りたくない人の中に、信仰を働かせて救われる人がいるということです。そして、イエス様の憐れみをもって近づかなければいけない人がいるということです。